

一〇四 獵師れふし仏を射る事「宇治拾遺物語卷第八・六」

昔、愛宕あたごの山に、久しく行ふ聖ひじりありけり。年ごろ行ひて、坊を出づる事なし。西の方に獵師あり。この聖を貴みて、常にはまうでて、物奉りなどしけり。久しく参りざりければ、餌袋えぶくろに干飯ほしいひなど入れて、まうでたり。聖悦びて、日ごろのおぼつかなさなどのたまふ。その中に、居寄りのたまふやうは、「この程いみじく貴き事あり。この年ごろ、他念なく経をたもち奉りてある験やらん、この夜ごろ、普賢菩薩象ふけんぼさつに乗りて見え給ふ。今宵とどまりて拝み給へ」といひければ、この獵師、「世に貴き事にこそ候ふなれ。さらば泊りて拝み奉らん」ととどまりぬ。

さて聖の使ふ童わらはのあるに問ふ。「聖のたまふやう、いかなる事ぞや。おのれも、この仏をば拝み参らせたりや」と問へば、童は、「五六度ぞ見奉りて候」といふに、獵師、「我も見奉る事もやある」とて、聖の後に、いねもせずして起き居たり。九月廿日の事なれば、夜も長し。今や今やと待つに、夜半過ぎぬらと思ふ程に、東の山の嶺より、月の出づるやうに見えて、嶺の嵐もすさまじきに、この坊の内、光さしいりたるようにて明くなりぬ。見れば、普賢菩薩象に乗りて、やうやうおはして、坊の前に立ち給へり。

聖泣く泣く拝みて、「いかに、ぬし殿は拝み奉るや」といひければ、「いかがは。この童も拝み奉る。をいをい、いみじう貴し」とて、獵師の思ふやう、聖は年ごろ経をもたもち読み給へばこそ、その目ばかりに見え給はめ、この童、我が身などは、経の向きたる方も知らぬに、見え給へるは、心は得られぬ事なりと、心のうちに思ひて、この事試みてん。これ罪得べき事にあらずと思ひて、矢とがりやを弓につがひて、聖の拝み入りたる上よりさし越して、弓を強く引きて、ひやうと射たりければ、御胸の程に当るやうにて、火を打ち消つごとくにて、光も失せぬ。谷へとどろめきて、逃げ行く音す。聖、「これはいかにし給へるぞ」といひて、泣き惑ふかぎりなし。男申しけるは、「聖の目にこそ見え給はめ、我が罪深き者の目に見え給へば、試み奉らんと思ひて、射つるなり。まことの仏ならば、よも矢は立ち給はじ。されば怪しき物なり」といひけり。夜明けて、血をとめて行きて見ければ、一町ばかり行きて、谷の底に大きな狸、胸より尖矢を射通されて、死して伏せりけり。

聖なれど、無智なれば、かやうに化されけるなり。獵師なれども、慮おもひがかりありければ、狸を射ころし、その化ばけをあらはしけるなり。